



夏の葬列そうれつ

学びナビ

時間と構成

小説の時間

『タオル』では、象徴的な表現を読み解いていくことを学びました。ここでは、できごとの順序を変えて語ることに考えてみましょう。

小説は主に、さまざまなかぎごとや登場人物の心情などから構成されています。そして、できごとのつながりや心情の変化にそった時間が流れています。

例えば、〈A 入学式は雨だった。〉〈B 虹が空にかかった。〉という二つのできごとが立て続けに起きた場合、ただ二つを並べただけでは、できごとどつうしをつながりが必ずしもよくわかりません。そこで、「入学式は雨だったが、式を終えて外に出ると、虹が空にかかっていた。」、あるいは、「虹が空にかかった。入学式の間降っていた雨がやんで、陽光がさしていた。」と書くと、AとBとの間に因果関係があったことがはっきりします。

起きた順にできごとを並べただけではつながりがわからない場合、できごとという「点」を「線」で結んで関係づける必要があります。現実の世界では、直接関係のないできごとも多いでしょうが、物語世界では違います。

目標

- 人物の心情や場面に応じた言葉の使われ方を理解する。
- 時間の順序に留意し、人物の心情の変化や言動の意味を考え、作品を解釈する。

象徴／タオル

時間と構成

語り手の位置／走れメロス

*できごとが起きた順序

A ↓ B

*因果関係を表す書き方の例

- ① AだからB
- ② BなぜならA

なんでわざわざできごとの起きた順序を変えて、語られているんだろ？



小説では、〈A↓B↓C〉という順序でできごとが起きたとしても、直接の因果関係がA↓Cにある場合、〈C↓A↓B〉という順序で書かれることもありま

す。

例えば、〈A 入学式は雨だった〉〈B 虹が空にかかった〉〈C 物事の始まりに空を見上げる習慣がついた〉という順序でできごとが起きたとします。

このままの順序で書くこともできますが、AとCの因果関係をはっきりさせるために、〈C↓A↓B〉の順で書くこともできるでしょう。つまり、「私は何かが始まるとき、空を見上げるようになった。それは、雨の入学式のあとに、虹が空にかかったのを見て感動したからだ。」などとなります。このほうが、A、B、Cの関係がより強く読者に伝わるのではないでしょう。

場面の展開と構成

できごとの起きた流れは一つでも、それをどのような順序で書くかは、書き手によって変わってきます。その結び方を「構成」といいます。

『夏の葬列』の冒頭部は、時間の流れからいえば最初のものではありません。作品は五つの場面に分けることができますが、現在と過去が交互に語られたり、現在の中に過去が挿入されたりするという点に、構成上の特色があります。

小説においては、このようにあえて時間的順序を変えて語ることがしばしばあり、わざわざ時間の流れを変えるからには、必ず意味があります。時間や構成に着目して読むことで、作品の理解がより深まっていけます。

20

15

10

5



ヒント

- できごとの順序を変えて語られることに、どのような効果があるのか、考えてみよう。
- できごとを時間順に書き直すと、作品の印象はどのように変わるのか、考えてみよう。



P 185



みちしるべ

1

4



夏の葬列そうれつ

やまかわ まさお
山川 方夫

海岸の小さな町の駅に降りて、彼は、しばらくはもの珍しげに辺りを眺めていた。駅前の風景はすっかり変わっていた。アーケードのついた明るいマーケットふうの通りができ、その道路も、硬く舗装されてしまっている。はだしのまま、砂利の多いこの道を駆けて通学させられた小学生の頃の自分を、急になまなましく彼は思い出した。あれは、戦争の末期だった。彼はいわゆる疎開児童として、この町にまる三か月ほど住んでいたのだった。——あれ以来、俺は一度もこの町を訪ねたことがない。その自分が、今は大学を出、就職をし、一人前の出張帰りのサラリーマンの一人として、この町に来ている……。

東京には、明日までに帰ればよかった。二、三時間は十分にぶらぶらでできる時間がある。彼は駅の売店でたばこを買い、それに火をつけると、ゆっくりと歩きだした。

夏の真昼だった。小さな町の家並みはすぐに尽きて、昔のままの踏切を越えると、線路に沿

10

5

▼ 葬

▼ 硬

▼ 疎

▼ 俺

▼ 尽

意 …… げ
意 なまなましい

い、両側にやや起伏のある畑地が広がる。彼は目を細めながら歩いた。遠くに、かすかに海の音がしていた。

なだらかな小丘の裾、ひよろ長い一本の松に見覚えのある丘の裾を回りかけて、突然、彼は化石したように足を止めた。真昼の重い光を浴び、青々とした葉を波打たせた広い芋畑の向こうに、一列になって、喪服を着た人々の小さな葬列が動いている。

一瞬、彼は十数年の歳月が宙に消えて、自分が再びあの時の中にいる錯覚にとらえられた。……呆然と口を開けて、彼は、しばらくは呼吸をすることを忘れていた。

濃緑の葉を重ねた一面の広い芋畑の向こうに、一列になった小さな人影が動いていた。線路脇の道に立って、彼は、真っ白なワンピースを着た同じ疎開児童のヒロ子さんと、並んでそれを見ていた。

この海岸の町の小学校（当時は国民学校といったが）では、東京から来た子どもは、彼とヒロ子さんの二人きりだった。二年上級の五年生で、勉強もよくでき、大柄なヒロ子さんは、いつも彼をかばってくれ、弱虫の彼を離れなかった。

よく晴れた昼近くで、その日も、二人きりで海岸で遊んできた帰りだった。

行列は、ひどくのろのろとしていた。先頭の人は、大昔の人のような白い着物に黒っぽい長い帽子をかぶり、顔の前で何かを振りながら歩いている。続いて、竹筒のようなものを持った若い男。そして、四角く細長い箱を担いだ四人の男たちと、その横をうつむいたまま歩いてく

15

10

5

意 文
起 々
伏 や

錯 瞬 喪 芋 裾 伏

る黒い和服の女。……

「お葬式だわ。」

と、ヒロ子さんが言った。彼は、口をとがらせて答えた。

「変なの。東京じゃあんなことしないよ。」

「でも、こつちじゃああるのよ。」ヒロ子さんは、姉さんぶって教えた。「そしてね。子どもが行くと、おまんじゅうをくれるの。お母さんがそう言ったわ。」

「おまんじゅう？ 本当のアンコの？」

「そうよ。ものすごく甘いもの。そして、とっても大きくなって、赤ちゃんの頭ぐらいあるんだって。」

彼は唾つばをのんだ。

「ね。……僕らにも、くれると思う？」

「そうね。」ヒロ子さんは、真面目な顔をして首をかしげた。「くれる、かもしれない。」

「ほんと？」

「行ってみようか？ じゃあ。」

「よし。」と彼は叫んだ。「競走だよ！」

芋畑は、真っ青な波を重ねた海みたいだった。彼はその中に躍り込んだ。近道をしてやるつもりだった。……ヒロ子さんは、あぜ道を大回りしている。僕のほうが早いに決まっている、もし早い者順でヒロ子さんの分がなくなっちゃったら、半分分けてやってもいい。芋のつるが

15

10

5

▼
唾

意
……ぶる

足にからむ柔らかい緑の海の中を、彼は、手を振り回しながら夢中で駆け続けた。

正面の丘の陰かげから、大きな石が飛び出したような気がしたのはその途中でだった。石はこちらを向き、急速な爆音ぼくおんと一緒に、不意に、何かを引きはがすような激しい連続音が聞こえた。

叫び声があがった。「カンサイキだあ。」と、その声はどなった。

艦載機かんざいだ。彼は恐怖に喉がつまり、とたんに芋畑の中に倒れ込んだ。炸裂音さくれつが空中にすさまじい響きをたてて頭上を過ぎ、女の泣きわめく声が聞こえた。ヒロ子さんじゃない、と彼は思った。あれは、もっと大人の女の人の声だ。

「二機だ、隠れろ！ またやって来るぞう。」奇妙きみょうに間のびしたその声の間に、別の男の声が叫んだ。「おーい、引っ込んでろその女の子、だめ、走っちゃだめ！ 白い服は絶好の目標になるんだ、……おい！」

白い服——ヒロ子さんだ。きつと、ヒロ子さんは撃たれて死んじゃうんだ。

その時第二撃げきが来た。男が絶叫した。

彼は、動くことができなかった。ほつぺたを畑の土に押しつけ、目をつぶって、懸命けんめいに呼吸いきを殺していた。頭がしびれているみたいで、でも、無意識のうちに体を覆おうとするみたいに、手で必死に芋の葉を引っ張り続けていた。辺りが急にしーんとして、旋回する小型機の爆音だけが不気味に続いていた。

突然、視野に大きく白い物が入ってきて、柔らかい重い物が彼を押さえつけた。

「さ、早く逃げるの。一緒に、さ、早く。だいじょぶ？」

▼陰

▼艦載機

ここでは、航空母艦から発進してきた戦闘機せんとうのこと。

▼奇艦

▼撃

▼文 とたんに

▼類 絶好

15

10

5

目をつり上げ、別人のような真つ青なヒロ子さんが、熱い呼吸で言った。彼は、口がきけなかった。全身が硬直して、目にはヒロ子さんの服の白さだけが鮮やかに映っていた。

「今のうちに、逃げるの、……何してるの？ さ、早く！」

ヒロ子さんは、怒ったような怖い顔をしていた。ああ、僕はヒロ子さんと一緒に殺されちゃう。僕は死んじゃうんだ、と彼は思った。声の出たのは、そのとたんだった。不意に、彼は狂ったような声で叫んだ。

「よせ！ 向こうへ行け！ 目だっちゃうじゃないかよ！」

「助けに来たのよ！」ヒロ子さんもどなった。「早く、道の防空壕に……。」

「嫌だったら！ ヒロ子さんなんて、一緒に行くの嫌だよ！」夢中で、彼は全身の力でヒロ子さんを突き飛ばした。「……向こうへ行け！」

悲鳴を、彼は聞かなかった。その時強烈な衝撃と轟音が地べたをたたきつけて、芋の葉が空に舞い上がった。辺りに砂ぼこりのような幕が立って、彼は、彼の手であおむけに突き飛ばされたヒロ子さんがまるでゴムまりのように弾んで空中に浮くのを見た。

葬列は、芋畑の間を縫って進んでいた。それはあまりにも記憶の中のあの日の光景に似ていた。これは、ただの偶然なのだろうか。

真夏の太陽がじかに首筋に照りつけ、めまいに似たものを覚えながら、彼は、ふと、自分には夏以外の季節がなかったような気がしていた。……それも、助けに来てくれた少女を、わざ

15

10

5

意
衝撃

▼
偶
憶

▼
弾

▼
衝

わが銃撃の下に突き飛ばしたあの夏、殺人を犯した、戦時中の、あのただ一つの夏の季節だけが、いまだに自分を取り巻き続けているような気がしていた。

彼女は重傷だった。下半身を真つ赤に染めたヒロ子さんはもはや意識がなく、男たちが即席の担架で彼女の家へ運んだ。そして、彼は彼女のその後を聞かずにこの町を去った。あの翌日、戦争は終わったのだ。

芋の葉を、白く裏返して風が渡っていく。葬列は彼の方に向かってきた。中央に、写真の置かれていたそのまっつな柩がある。写真の顔は女だ。それもまだ若い女のように見える。……不意に、ある予感が彼をとらえた。彼は歩き始めた。

彼は、片足をあぜ道の土に載せて立ち止まった。あまり人数の多くはない葬式の人の列が、ゆつくりとその彼の前を過ぎる。彼は少し頭を下げ、しかし目は熱心に柩の上の写真を見つめていた。もし、あの時死んでいなかったら、彼女はたしか二十八か、九だ。

突然、彼は奇妙な喜びで胸がしぼられるような気がした。その写真には、ありありと昔の彼女の面影が残っている。それは、三十歳近くになったヒロ子さんの写真だった。

まちがいはなかった。彼は、自分が叫び出さなかったのが、むしろ不思議なくらいだった。

——俺は、人殺しではなかったのだ。

彼は、胸にわき上がるものを、懸命に冷静に抑えつけながら思った。たとえなんて死んだにせよ、とにかくこの十数年間を生き続けたのなら、もはや彼女の死は俺の責任とはいえない。

銃

架

意
即席意
ありあり意
面影文
むしろ

少なくとも、俺に直接の責任がないのは確かなのだ。

「……この人、足が悪かった？」

彼は、群れながら列のあとに続く子どもたちの一人に尋ねた。あの時、彼女は太腿をやられたのだ、と思い返しながら。

「ううん。悪くなかったよ。体は全然じょうぶだったよ。」

一人が、首を振って答えた。

では、治ったのだ！ 俺は全くの無罪なのだ！

彼は、長い呼吸を吐いた。苦笑が頬に上ってきた。俺の殺人は、幻影にすぎなかった。あれからの年月、重苦しく俺を取り巻き続けていた一つの夏の記憶、それは俺の妄想、俺の悪夢でしかなかったのだ。

葬列は確実に一人の人間の死を意味していた。それを前に、いささか彼は不謹慎だったかもしれない。しかし十数年間もの悪夢から解き放たれ、彼は、青空のような一つの幸福に化してしまっていた。……もしかしたら、その有頂天さが、彼にそんなよけいな質問を口に出させたのかもしれない。

「なんの病気で死んだの？ この人。」

うきうきした、むしろ軽薄な口調で彼は尋ねた。

「このおばさんねえ、気がちがっちゃってたんだよ。」

ませた目をした男の子が答えた。

15

10

5

▼ 吐
▼ 幻
▼ 妄
▼ 謹
▼ 慎

文 確か
意 幻影
類 いささか
意 不謹慎

「一昨日ねえ、川に飛び込んで自殺しちゃったのさ。」

「へえ。失恋でもしたの？」

「バカだなあおじさん。」運動靴の子どもたちは、口々にさもおかしそうに笑った。

「だってさ、このおばさん、もうおばあさんだったんだよ。」

「おばあさん？ どうして。あの写真だったら、せいぜい三十くらいじゃないか。」

「ああ、あの写真か。……あれねえ、うんと昔のしかなかったんだってよ。」

はなを垂らした子があとを言った。

「だってさ、あのおばさん、なにしろ戦争でね、一人きりの女の子がこの畑で機銃で撃たれて死んじゃってね、それからずっと気がちがっちゃってたんだもんさ。」

葬列は、松の木の立つ丘へと登り始めていた。遠くなったその葬列との距離を縮めようというのか、子どもたちは芋畑の中に躍り込むと、喚声をあげながら駆け始めた。

立ち止まったまま、彼は写真を載せた柩が軽く左右に揺れ、彼女の母の葬列が丘を登っているのを見ていた。一つの夏と一緒に、その柩の抱きしめている沈黙。彼は、今はその二つになつた沈黙、二つの死が、もはや自分の中で永遠に続くだろうこと、永遠に続くほかはないことがわかっていた。彼は、葬列のあとは追わなかった。追う必要がなかった。この二つの死は、結局、俺の中に埋葬されるほかはないのだ。

——でも、なんとという皮肉だろう、と彼は口の中で言った。あれから、俺はこの傷に触りた

15

10

5

▼ 恋

▼ 喚
▼ 揺▼ 埋
▼ 類
▼ 意
埋 葬
結 局



山川 方夫「一九三〇—一九六五」

東京都に生まれた。小説家。

作品に『日々の死』『海岸公園』などがある。

《出典》『山川方夫全集 第四巻 愛のことく』に
よった。

くない一心で海岸のこの町を避け続けてきたというのに。そうして今日、せっかく十数年後のこの町、現在のあの芋畑を眺めて、はつきりと敗戦の夏のあの記憶を自分の現在から追放し、過去の中に封印してしまつて、自分の身を軽くするためにだけ俺はこの町に降りてみたというのに。……全く、なんとという偶然の皮肉だろう。

やがて、彼はゆつくりと駅の方角に足を向けた。風が騒ぎ、芋の葉のおいがする。よく晴れた空が青く、太陽はあい変わらずまぶしかった。海の音が耳に戻ってくる。汽車が、単調な車輪の響きをたて、線路を走っていく。彼は、ふと、今とは違う時間、たぶん未来の中の別な夏に、自分はまた今と同じ風景を眺め、今と同じ音を聞くのだろうという気がした。そして時を隔^{へだ}て、俺はきつと自分の中の夏の幾つかの瞬間を、一つの痛みとしてよみがえらすのだろうか……。

思いながら、彼はアーケードの下の道を歩いていた。もはや逃げ場所はないのだという意識が、彼の足どりをひどく確実なものにしていた。

10

5

同 一心
同 封印
同 単調
意 隔てる

千 みちしるべ

内容を捉えよう

① この作品は、五つの場面に分かれている。時間の流れに着目しながら、場面ごとにてきごとをまとめよう。

読み深めよう

② 次の表現に着目して、その効果を考えよう。

- (1) 「化石したように」(P 177 L 4)
- (2) 「大きな石」(P 179 L 2)
- (3) 「大きく白い物」「柔らかい重い物」(P 179 L 17)

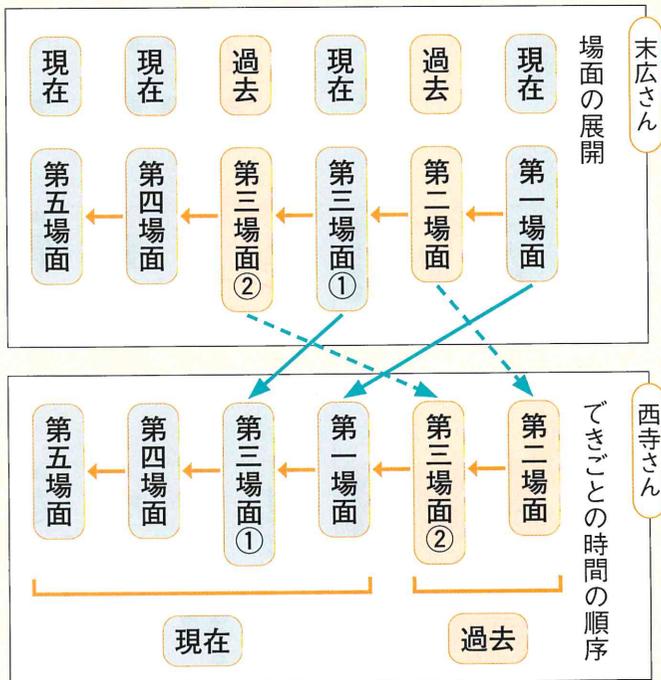
③ 主人公を表す表現について、「彼」「俺」「自分」「僕」が使い分けられている。このような表現の仕方にはどのような効果があるのか、考えよう。

参考 それぞれどのような場面で用いられているかを確認してみよう。

自分の考えを伝え合おう

④ 「現在」と「過去」が入り交じるといふ作品の構成上の特徴がもたらす効果について、意見を交流しよう。

参考



⑤ 「もはや逃げ場所はないのだという意識が、彼の足どりをひどく確実なものにしていた。」(P 184 L 10～11) について、

- (1) どういうことか、わかりやすく説明しよう。
- (2) 「彼の足どりをひどく確実なものにしていた。」のはなぜだろうか、考えを伝え合おう。



●言葉と表現

「——でも、なんとという皮肉だろう、……なんとという偶然の皮肉だろう。」(P183 L18～P184 L4)には、「あれ」「この傷」「この町」「あの芋畑」「あの記憶」のように、指示語が混在している。どのように使い分けられているか、考えよう。

振り返り

- 人物の描写や主人公を表す表現の使い分けについて、役割と効果を理解しているか。
- 時間の順序と作品の構成や展開に留意し、人物の心情の変化や言動の意味について考えを深めているか。
- この作品の中で、最も印象に残った表現とその効果についてまとめよう。

この教材で学ぶ漢字

176	硬	コウ	硬貨
		かたい	硬さ
176	葬	ソウ	葬祭
176	疎	ソ	疎遠
176	俺	おれ	俺
177	伏	フク	伏線
		ふしせる	うつ伏せ
176	尽	ジン	尽力
		つくす	心を尽くす

179	奇	キ	奇数
179	艦	カン	艦船
179	陰	イン	陰気
		かげ	日陰
		かげる	陰り
178	唾	ダ	唾液
		つば	唾
177	錯	サク	錯誤
177	瞬	シュン	瞬間
177	喪	ソウ	喪失
		も	喪主
177	芋	イモ	焼き芋
177	裾	スソ	裾野

176	砂利(じやり)	「付表」の語	181 面影(おも・おもて)	181 有頂天(ウ)	176 砂利(じやり)
179	激しい	177 宙	176 就職	180 訪ねる	180 映る
184	痛み	181 裏返す	181 染める	180 映る	180 映る

182	吐	ト	吐息
		はく	吐き出す
182	架	カ	架空
		かける	橋が架かる
181	銃	ジュウ	銃声
180	偶	グウ	偶数
180	憶	オク	憶測
180	弾	ダン	弾圧
		ひしく	弾み
		たま	弾み
180	衝	シヨウ	衝動
179	撃	ゲキ	打撃
		うつ	はさみ撃ち
183	埋	マイ	埋蔵
		うめる	埋め立て
183	揺	ヨウ	動揺
		ゆれる	揺する
183	喚	カン	喚起
183	恋	レン	恋愛
		こい	母を恋う
		こい	春が恋しい
182	慎	シン	慎重
		つつしむ	慎み深い
182	謹	キン	謹賀新年
		つつしむ	謹んで
182	妄	モウ	妄信
182	幻	ゲン	幻想
		まぼろし	幻の山

●小学六年生の漢字

広がる本の世界 6

学びを深める読書案内



夏の葬列
山川方夫

人生の残酷さと哀しさを鋭く描いた表題作のほか8編を収録。



寺山修司少女詩集
寺山修司

『愛の木工／心の修理をします』など、独特の感性で愛を描く。



星ちりばめたる旗
小手鞠るい

アメリカの日系移民、祖母・母・娘の三代百年にわたる物語。



東京が燃えた日
早乙女勝元

東京大空襲の日を、自らの体験と取材、資料、写真により再現。



鉄道員
浅田次郎

まもなく廃線になる鉄道の駅長、乙松のもとに女の子が訪れる。



笑う月
安部公房

「夢」から着想を得た表題作『笑う月』など17編を収録。



空飛ぶ馬
北村薫

日常に潜む謎からストーリーが展開していく。



平和のバトン 広島の高校生
たちが描いた8月6日の記憶
弓狩匡純 作／広島平和記念資料館 協力

高校生たちが被爆者に話を聞き、その記憶を絵に描き記録していく。



短歌部、ただいま部員募集中!
小島なお／千葉聡

短歌とは日々の思いや悩み、そして今を三十一文字にのせること。